パリ通信・第144号

ニコラ・ド・スタール回顧展

今秋のフランスは本当によく雨が降る。10月と11月の降雨量は過去最高で、12月に入っても次々に低気圧が上陸しパリも雨が降らない日が珍しい。セーヌ川水位も徐々に上がり、10日(日)には2mを超えて2,75m～3mに達する気配である。11月からはセーヌ川増水期間に入るので当然と言えば当然だが、水量も増えて流れも速くなるこの時期、修復工事を待つ船「ルイーズ・カトリーヌ号」(アジール・フロッタン)が気になる。メセナが決まらず工事ができないまま3年以上が過ぎて、来春こそはコンクリート躯体だけでも修復できることを願っている。

クリスマスを2週間後に控えてシャンゼリゼ通り、モンテーニュ通り、百貨店、商店街とイリュミネーションが綺麗だが、雨ばかりでプレゼントを買って早足で帰宅する週末となった。年末年始の慌ただしさを避けて「ニコラ・ド・スタール回顧展」に行った。

ニコラ・ド・スタール(1914-1955)は1914年1月サント・ペテルスブルグの貴族の家庭に生まれる。1917年ロシア革命が勃発し危険を感じた一家は1919年ロシアを離れてベルギーに亡命する。1922年亡命先で両親を亡くし孤児となったニコラは養子となりベルギーで育ち、1933年ブリュッセルのボザールで絵画を学ぶ。ブリュッセルに長く留まることはなく、34年から南仏、スペインを回り、一年間モロッコを旅する間に女流画家ジャニンヌ・ギヨー(1909-1946)と出会い生活を共にする。

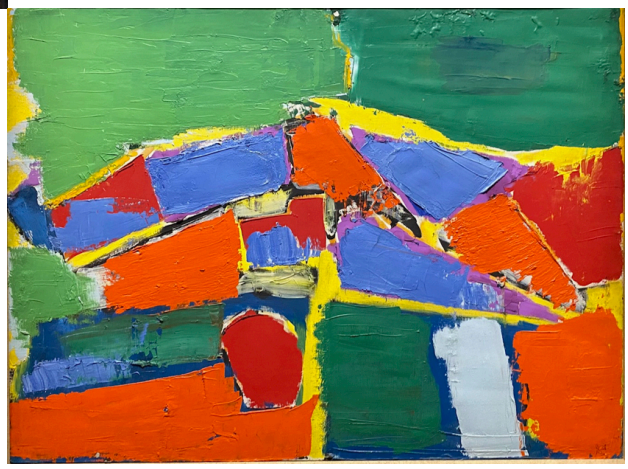
第一次世界大戦が勃発するとフランス外人部隊に入隊し、1940年からニース、1942年にはパリ14区にアトリエを持つ。ジャニンヌと過ごした時期は抽象絵画が主流で、同じロシア人ワシリー・カンジンスキー(1866-1944)がパリで活躍していた。ド・スタールも貧困な中で試行錯誤を繰り返し意欲的に創作を行い、自身の抽象絵画を確立していった。1946年ジャニンヌが流産から亡くなり、ド・スタールの下積み時代が終わる。

青の大きなコンポジション
(1950-1951)

ジャニンヌが亡くなった数ヶ月後フランソワーズ・シャプートン(1925-2012)と結婚し3人の子供が生まれ、1948年ニコラ・ド・スタールはフランスに帰化する。フランソワーズとの結婚を機に経済的に安定し

1950年頃からはこれまで暗かった画風に明るい色が配されるようになる。肉厚な色の層を重ねたコンポジションを繰り返し、画商(ジャック・デユブール)が付き、画家として名前も知られるようになる。

1952年にはパリのサッカースタジアムで観たフランス・スウェーデン戦を描いたり、イル・ド・フランス、南仏、ノルマンディーの風景と多くの作品を残した。1953年、南仏プロヴァンスの眩しい太陽、暑い空気、輝く光との出会いで作品は鮮やかな赤、緑、黄色と一気に明るくなる。1953年にはメネルブ(プロヴァンス)にアトリエを購入する。そして1953年8月シシリア島に向けてイタリア旅行に出る。フランソワーズと子供たちだけでなく、ルネ・シャールとその女友達も一緒だった。シシリアと題された作品は旅行からメネルブに戻って仕上げられ、画家の感受性を反映する緑、赤、黄色が眩しい。このシシリア旅行で一緒だった



ジャンヌ・ポルジュと恋愛関係になり、彼女と会うために1954年9月南仏アンティーブにアトリエを借りる。そして翌1955年3月海に面したアトリエの屋根から飛び降り自殺をし41歳で生涯を閉じた。

幼くして祖国も両親も失ったニコラ・ド・スタールにとって生きる拠り所は創作活動であったに違いない。そして創作活動は孤独で、彼を支えた女性、家庭、子供たちがいても満たされることはなかったのだろう。生まれた時から転々とし、絵を描くことで燃え尽きた人生だった。

20世紀ロシアからフランスに移り住んだ芸術家は多い。シャガール、ゴンチャロフ、カンジンスキーなどパリは多くの外国人芸術家を受け入れ、現代絵画に貢献している。

他者を受け入れることで自国の文化を豊かにしてきたが、今日は移民問題に見られるように他者を許容することが難しくなっている。
「ニコラ・ド・スタール回顧展」はパリ市立近代美術館で2024年1月21日まで開催している。